第16回国際日本文学研究集会公開講演（1992.11.14）

漂泊者 萩原朔太郎

A WANDERING POET : HAGIWARA SAKUTARŌ

Mikołaj MELANOWICZ*

The outstanding Japanese poet Hagiwara Sakutarō (1886-1942) has been called the "Japanese Baudelaire". This comparison contains both, the evaluation of the importance of his work in the history of the twentieth century literature of this country and the suggestion of the existing internal similarities bringing together the two poets of different epochs and different as well as distant cultures.

Here are the main poetic volumes of Hagiwara Sakutarō : *Tsuki-ni hoeru* (I am Baying to the Moon,1917), *Aoneko* (Blue Cat, 1923), *Teihon-Aoneko* (Standard edition Aoneko, 1936), *Chō-o yumemu* (I am Dreaming about Butterfly, 1923), *Junjō-shōkyoku-shū* (Collection of Naive Songs, 1925), and *Hyōtō* (Ice Island, 1934).

---

*ワルシャワ大学教授。国文学研究資料館客員教授。ワルシャワ大学東洋学研究所卒業1968年博士号取得。1964－66、1972－73年早稲田大学留学。1988年カンサス大学客員教授、1990－91年国際日本文化研究センター客員教授。著書に「谷崎潤一郎と日本の土着的伝統の世界」（ワルシャワ大学出版）、「日本文学概説」（東洋学研究所出版）、「日本文学史」（出版中）。翻訳に芥川龍之介「河童」、谷崎潤一郎「蘆刈」「春琴抄」、夏目漱石「こころ」「吾輩は猫である」、大江健三郎「万延元年のフットボール」、川端康成「千羽鶴」「眠れる美女」、小松左京、「日本沈没」などがある。

This lecture is rather going to be an attempt to present the lyrical hero (the term serves here to define a kind of synthesis of many lyrical subjects appearing in a given collection of poems) - the disillusioned man reflected mainly in the *Chō-o yumemu* and *Hyōtō* collections.

序分の変わりに

今日の講演の主人公は萩原朔太郎の作品である。詩人の基本的な六詩集の中から後期の「氷島」という1934年の詩集に集中したいとおもう。その詩集のなかの「漂泊」という言葉がキーワードになっている。私の中の萩原朔太郎についての個人的体験を少し説明してから、「氷島」の思想と感情の流れについて話してみたい。

「氷島」は二十四篇ほどの、新しい詩は二十一をふくんだ、文語体で書かれた小さい詩集であるが、日本近代詩史では優れた作品だと私は思う。詩人もそう思われてほしいようである。序文にはつぎのように書いている。

> この詩集に納めた少数の詩はすくなくとも著者にとっては純粋にパッショネート詠嘆誌であり、詩的情熱のもっとも純一の興奮だけを、素朴直截に表出した。換言すれば著者は、すべての芸術的意図と芸術的野心を廃棄し、単に「心のまま」に自然の感動に任せて書いたのである。したがって著者は、決して自ら、この詩集の価値を世に問おうと思って居ない。この詩集の正しい批判は、おそらく芸術品であるよりも著者の実生活の記録であり、切実に書かれた心の日記であるのだろう。　　（全集１巻357ページ）

おなじ「自序」で「著者は『永遠の漂泊者』であり、何所に宿るべき家郷ももたない」と書いている。そしておわりに肝心な呼び掛けがある。

> すべての詩篇は「朗吟」であり、朗吟の情感で歌われて居る。読者は声にだして読むべきであり、けっして黙読すべきではない。これは「歌うための詩（うた）」なのである。

では声を出して朗読してみよう。

漂泊者の歌

日は断崖の上に登り
憂ひは陸橋の下を低く歩めり。
無限に遠き空の彼方
續ける鐵路の柵の背後(うしろ)に
一つの寂しき影は漂ふ。

ああ汝　漂泊者！
過去より來りて未來を過ぎ
久遠の郷愁を追ひ行くもの。
いかなれば蹌爾として
時計の如くに憂ひ歩むぞ。
石もて蛇を殺すごとく
一つの輪廻を断絶して
意志なき寂寥を蹈み切れかし。

ああ　悪魔よりも孤獨にして
汝は氷霜の冬に耐えたるかな！
かつて何物をも信ずることなく
汝の信ずるところに憤怒を知れり。
かつて欲情の否定を知らず
汝の欲情するものを彈劾せり。
いかなればまた愁ひ疲れて
やさしく抱かれ接吻(きす)する者の家に歸らん。
かつて何物をも汝は愛せず
何物もまたかつて汝を愛せざるべし。

ああ汝　寂寥の人
悲しき落日の坂を登りて
意志なき断崖を漂泊(さまよ)ひ行けど
いづこに家郷はあらざるべし。
汝の家郷は有らざるべし！

では私の萩原文学の体験を処理してみよう。そして結局、朔太郎は漂泊者または定住漂泊者であったかどうか答えてみよう。

私のなかの萩原朔太郎

ちょうど1年前にここでは谷崎文学における美意識についてお話する機会を与えられまして、今回はおもいがけない、名誉ある義務を引き受けて、どうしてまた萩原朔太郎をテーマにしたと聞かれてもおかしくないでしょう。幸田露伴や森鷗外などは、まだ国文学研究資料館の二十周年には悪くはないですが、「羽衣」か「高砂」などが一番良かろうともおもわないでもないです。(それはある程度の朔太郎風な表現です：たとえば「なにを撃とうというでもない……なにを喰べようというでもない」、「大砲を撃つ」参照)

とにかくそういう場合には個人的な理由、また個人的な体験が瞬間的に決定してしまう。それは仕方がないでしょう。

ことわっておきますが萩原といい、朔太郎といって、萩原の精神といっても、いつも萩原の書いた文学の主人公の性質を指すつもりです。

1886年の五月に前橋で生まれて、弱虫で、だらしない、変てこで、また不能な青年であった、具体的人間のことをいうわけではありません。

私の萩原はすなわち「月に吠える」(1917)、「新しき欲情」(1992)、「青猫」(1923)、「蝶を夢む」(1923)、「純情小曲集」(1925)、「氷島」(1934)、「日本への回帰」(1938)、といった文章に表れる人物を考えるのです。

実際の詩人萩原朔太郎はそれほど移動しなかったようである。まず、前橋から東京の馬込にしばらくのあいだうつった時に妻稲子と別れた。また子供を二

人抱えて、郷里前橋に住んでいた父の家に帰るのである（1929）。十年近くして（1938）福島県のある詩人の（大谷忠一郎）妹と結婚したのである。

漂泊という観点からいえば朔太郎自身それほど放浪しなかったといえるのである。前橋に生まれて、その地方都市の中学校を落第しながら、卒業して高等学校（熊本五校）へ行った。そこの英文科に長く席を置けなくて、次の年に落第して岡山の高校（六校）に入って、また落第して退学した。そのあとでも前橋から東京へ出たり、慶応大学に席をおいたりして勉強を試みたが、やっぱりだめであった。そのくらいの放浪の時もあったことは事実である。前橋でマンドリンをひいたり、西洋の音楽に夢中になって、ぽつぽつ詩を書いたり本をよんだりして教養を身につけようとしたのである。時々東京で芝居も見に行ったり名所見物もした。それに温泉旅行もかれの好きな遊びであったようである。でも一応空間的に定まった生活であった。漂泊者の生活ではなかったと言ったほうが正しいのである。

1913年と1917年の間、詩を書いて、デビューして、室生犀星の「叙情小曲集」を読んで感動して手紙を室生へ書いて交際をはじめる。ほかの詩人と会うこともある。本格的な創作にとりくむのである。

私のなかの萩原朔太郎 — その二 —
絶望の精神史の流れから

私が早稲田大学に留学し、「月に吠える」や「青猫」の悲しい詩の世界に耽っていたときから、もう28年たちました。柳田泉先生（1894－1969）や稲垣達郎先生（1901－1986）や暉峻康隆先生（1908－）の授業を受けた時があったのである。大学と大学院の友達に佐藤房義という人物がいた。その人は詩を書いて萩原朔太郎の作品を読んでいた。伊藤信吉（1906－）と子弟の関係を持っていたのである。萩原朔太郎を個人的に知っていた伊藤信吉はちょうどその時、朔太郎の研究もしていた。「萩原朔太郎研究」（1966年）を出し、また十年後「萩原朔太郎」という書籍で読売文学賞を得た。萩原朔太郎研究会会長や現代詩人

会会長も勤めた人である。そういった文化人の自宅も訪問したことがある。その二人の大切な知り合いのおかげで朔太郎の寂しさや孤独感の意味を理解しようとした。朔太郎の里前橋市につれてもらい、また萩原葉子（1920－）の自宅にもお邪魔した。ちょうど「木馬館」（1964）を出版し、新潮社文学賞と田村俊子賞を受賞した「天上の花」を彼女が書いていたときであった。

そういった環境で、朔太郎の詩を読んだり訳したり、また解釈を試みた。

萩原朔太郎精神を理解するために明治半ばから現われるようになったいわゆる絶望の系譜を探ろうとした時であった。二葉亭四迷の「浮雲」（1887－89）、北村透谷、夏目漱石、志賀直哉、有島武郎、芥川龍之介などの作品のなかの人物の厭世感や知識人の目的の損失と作り上げられてゆく日本社会にたいする不信感や絶望などが豊富に見出された。

萩原朔太郎も多くの作品を読んだ。たとえば漱石の「行人」を読んで、自分が悩まされた疑問をそこにみつけた事実もある。「人間としてなすべき仕事」をさがしていたと1917年11月前後手紙に書いた。（近代文学研究講座、15巻P50）

そういうふうに日本近代文学には絶望感の流れを把握することができた。いい具合に金子光晴（1895－1975）の「絶望の精神史」（1965）を読んで感激した覚えがあるのである。私の手探りの努力が金子の本で強く支えられたことになった。日本人の近代精神史にはやっぱり暗い源流が重大であると確信した。また芸術思想には萩原の役割も小さくはないと思った。

その段階になって、朔太郎の作品を読んで、詩を楽しむことより近代日本の精神構造を研究するほうが面白くなった。それで日本の近代化の裏を覗くことも出来るようになった。萩原朔太郎の「月に吠える」や「青猫」について論文を完成して間もなく、その孤独な世界を離れて、谷崎潤一郎の快楽の楽園のほうへ逃げたといってもいいすぎではない。1970年代に入って日本人も朔太郎の地獄を忘れようとした。落第する弱者は学校にとっては困ったモデルだったかもしれない。絶望の人、無用の人が問題にされない時代がきたようにおもえた。

虚無への道

萩原朔太郎の主人公には、牧歌的理想郷のアルカディアがない。幸福や平穏の里もない。ときたま自分の眼と郷愁を海のかなたへ向けようとしている。その果てはただ知らぬ空間になっていたのである。海のかなたに国があると考えようともしなかった。鎖国時代の遺産であろう。

他の世界に逃げたく、どんな世界へ逃げたいとはっきりしらない。ひとつだけ願っている。それは安らぎや愛する人のあたたかさなのである。よく逃走を夢見たが、いちども実現することができなかった。幻想のなかだけには現在の自分の世界からはなれてどこへでもない、むなしさと虚無へとんでいく。

成功しなかった逃走

その孤独な主人公は何から逃げたいのだろうか。はっきりした返事が「蝶を夢む」の「絶望の逃走」という詩で答えられているのである。(初版「太陽」1922、9月)

おれらは絶望の逃走人だ
おれらは監獄やぶりだ
あの陰欝な柵をやぶって
いちどに街路へ突進したとき
そこらは反逆の血みどろで
看守は木つ葉のようにふるえていた。(全集1巻231－4)

主人公は、謀反人か、なんらかの無政府主義者を代表するような形で自己紹介するのである。監獄の柵を破って逃げていったという出来事は、昔に起こった。あの時からいままでずっと逃げ続けている。いまでも逃走中である。さまざまの自然を見ながら逃げて行く。

野や、海や、湖水や、山脈や、都会や、部落や、工場や、兵営や、病院や、銅山や

その主人公を留める力がない。かれはひとりではないが、かれらにとって逃走以外生きる価値はないのである。「無頼漢」だからなにも信じない。

神様だって信じはしない、何だってしんずるものか
良心だってその通り
おれらは絶望の逃走人だ。(全集1巻233)

その論説的な表現には説明がいらない。詩人は直接にいっている。行を長くして、またみじかくするために動的な力強さを得るのである。すべての行(39)には推定やためらいなどがない。敬語もない。「月に吠える」や「青猫」のようなあいまい、不明瞭、ためらいをあらわす文法の形がない。そういった文法の形がその詩の特徴になって、前の詩とはちがう。この詩では考慮や想像する余地がない。活動そのものが表現されている。活動というのは逃走であるのだ。「青猫」の場合、静止的な状態、受け身の態度がもっとも典型的である。

それとちがって、「絶望の逃走」にはすべての文法的な形式がいわゆる「絶望的」で、生きるか、死ぬかのような逃走を表現するのである。宿命からの逃走であるにちがいない。

宿命からでも逃走する(全集1巻233)

宿命そのものの本質と矛盾しているにもかかわらず逃げようとしている。多分決められた境を主人公(たち)は超えることがないであろう。宿命を信じさせる神話の範囲に生きる限りは、逃げる以外可能性がない。

日はすでに暮れようとし
非常線は張られてしまった
……
ああ逃げ道はどこにもない
おれらは絶望の逃走人だ。

「いわば絶望からの逃走という意味で書きはじめられた『絶望の逃走』は……絶望的にほかならない」と那珂太郎が指摘した。(近代文学鑑賞講座15巻122)

行動の人々と無意識の人生

絶望と宿命から逃げる可能性がない。どうしたらいいのだろう。時々に反抗すること、行動のできる、自分の未来を作る人々をうらやむしかない。「僕等の親分」でいうように

僕等の親分は自由の人で
青空を行く鷹のようだ。
もとより大胆不敵な奴で
計画し、遂行し、予言し、思考し、創見する。
かれは生活を創造する。
親分！（全集１巻236）

行動の人々は自由のものである。自分の計画や夢を実現するのである。彼らにとって宿命の制限がない。かれらは生活をつくる。自分なりの世界をつくる。受け身の態度をとるもの、自分の住んでいる世界と和解することのできないものは自由を知らない。

行動の人が自由であることを象徴するのは「商業」という詩に出ている商人である。

商人よ！君は冒険にして自由の人

職業のない人にとって、自分という主人公のように仕事のないように思う主人公にとっては羨ましい生き方の典型である。絶望的に意味のない世界の囚人である萩原の主人公はどこかに、すぐそばかもしれない行動の人たち、自由の人たちが住んでいたと知っている。羨ましく思いながらかれらの仲間になれなかった。というのはかれはなんにも得なくてすべてを失った群れに属している。

われらの生活は失踪せり。（全集１巻242）

と「まずしき展望」のなかで萩原がいっている。

それでは人生というのはなんであるか。意義のあるものであるか。意義ありうるのか。だれも答えてくれないと主人公が悩むのである。

聖人よあなたの道をおしえてくれ

聖人よあなたの真理をきかせてくれ。

・・・・・・・・・・・・

ああ私は家を出てなにの学問をまなんできたか

・・・・・・・・・・

聖人よどうして道を語らないか

以上のように「桃李の道」の主人公は老子に向かっていう。

主人公は家を出たこと、なにかを勉強したことを語った。しかし勉強した学問はなんにも与えなかった。疑問ばかり増やしたのである。だから青春をむだに失った。

かき

恋も名誉も空想もみんな楊柳の牆に涸れてしまった。(全集1巻271)

時計と世界の構造

最後に夢や幻想が遺っている。それだけである。記憶力も衰える…時計がさびて止まる。時間が死んでいく。

…記憶の時計もぜんまいがとまってしまった。

「風船乗りの夢」(全集1巻272)

主人公をのみ込む時間のドラマが意識されるようになる。

人の知らない秘密の抜け穴、「時」の胎内へもぐりこんだ。

ああこの消亡をだれが知るか?

「古風な博覧会」(全集1巻274)

「しょうぼう」は「きえうせる」ことを意味し、多分涅槃のことをもさすのである。

日時計の時刻はとまり

「荒寥地方」(全集1巻276)

私のあうむ時計はこわれてしまった。

「暦の亡魂」(全集1巻281)

ぼくらは過去もない未来もない

そうして現実のものから消えてしまった……

「猫の死骸」、(全集1巻286)

そういうふうに萩原朔太郎全集の第一巻を順番に読んで、「時計」という詩にいきあたる。いわゆる「青猫定本」に入っている作品である。その詩の叙情主人公は「古いさびしい空家の中」にいるのである。「物悲しい夢を見ながら／古風な柱時計のほどけていく／錆びたぜんまいの響を聴いた。」

その部屋には「昔の恋人の写真」がのこっているが、彼女は記憶にはない。あるのは幽霊の特殊な音のするふるぼけた、ぜんまいののろい時計の音だけである。それは主人公の世界である。荒寥とした、不毛地帯のような世界である。その世界の時間はゆるめて、のろくなって、死んでしまった。

引用したすべての時計は失せてゆく、または死滅した時間を象徴する。果てのない空間、虚無を象徴するのである。そういった、命と死の境に主人公がさまよっている。それは主人公の世界の終わりである。と同時に萩原朔太郎の哲学のゆきづまりでもある。絶望、病気、孤独、恐怖、悲しみ、宿命との戦い、諦め、行動や自由のための戦いをあきらめることは萩原の世界の構造になっている。かれの主人公は自分や自分の生きる世界の危機を意識して、すべてを失ったと考え込んでいる。

鴉のように零落して

靴も運命もすり切れちゃった。

……

なにが人生について残って居るのか。

「郵便局の窓口で」(全集1巻301)

以上引用した詩は「蝶を夢む」「青猫以後」「定本青猫」にのっているが、萩原の芸術的な追及の最後の段階に属しているのである。ここでは技法的な追及がない。ここでは、新しい形式や様式の発見のための努力というより哲学的な側面がめだつのである。

「月に吠える」、「青猫」などの基本的な思潮や情緒の流れに孤独感、宿命、あきらめ、絶望があった。それに絶望からの逃走が強調されるようになった。ある程度無政府主義的な態度を取ろうとする主人公は、現在までの価値観を否定した。そしていわゆる監獄という現実から逃げようとしている。その監獄というのは、宿命と絶望である。逃走というトポス／テーマ／は、自由への行動の意味を指摘するためにとりあげられたようにおもわれるが、実はそうではない。逃走の無駄を証明するためである。逃走は失敗に終わるはずである。宿命と絶望から逃げ道がない。主人公は出発点にもどるのである。聖人や賢者はだまっている。主人公が死の淵にたっているにもかかわらず、適当な道を教えてくれない聖人である。

ああ師よ！　私はまだ死なないでしょう。

「桃李の道」（全集１巻272）

世界の肖像は静止したようになる。生命は動きのないものになる。時間はほぐされた時計のぜんまいのようなものになる。しかしながらその動きも静止する。この先にも人間的な意味のあるなにものもない。虚無だけである。ここは萩原の思想の行き止まりである。その先になんにもない。いく道がない。後退するか命を諦めるしかない。萩原は後退することにした。そういった主人公を「郷土望景詩」（1925）と「氷島」（1934）に描いた。

帰り道

口語自由詩を作っていた詩人は「青猫以後」のあとで口語をやめて、文語にもどった。それに漢文調もとりいれた。それは詩人の新しい態度の結果であった。その時期に詩人は、ためらいなく外にむけた怒りや否定を表現しようとした。「青猫」にでている怠惰の、つかれきった主人公を形成することをやめて、断固とした態度の人間をみせようとした。

主人公は自分がアウトサイダーの立場にいることと、現代人の生活の主流の外に生きている事を意識している。かれの生きている世界は感受性のにぶい、

無関心な、冷淡なものである。描写された世界は割合に具体的であって（家族、地下鉄、動物園など）、普通の、日常に近いようであるにもかかわらず「普通」ではない。

詩人の言葉をかりると、この世界は凍ったものである（氷のように冷たい）。

題名のように氷島である。年が過ぎていくが、なんにも変わらない。こんな世界に生きるのは苦痛である。しかし違う人生がないから、悩んでも意味がない。

見よ！人生は過失なり。
今日の思惟するものを断絶して
百度もなお昨日の悔恨を新たん。

「新年」（全集１巻370）

こんな時間を生きる主人公は自分の家がない。祖国もない。絶えずさまようのである。永久の放浪者である。

時間を漂泊する人間の幻だといってもいいのである。萩原朔太郎の主人公は失われた過去と失われた未来の境に、漂泊するものである。「過去より来りて未来を過ぎ／久遠の郷愁を負い行くもの。」（「漂泊者の歌」）

以上は講演の下書きで、話した事は多少即興的なものであって必ずしも一致するのではない。

全集＝萩原朔太郎全集、新潮社、1959。責任編集　室生犀星　三好達治　伊藤信吉